世界標準の人材を育成

横浜・みなとみらい21（MM21）地区に来年4月にキャンパスを開設する神奈川大学。9月には兼子良夫学長が兼務する形で新理事長に就任した。発祥の地への原点回帰を期した理由や、グローバル化、少子化の時代に求められる大学の在り方について、兼子理事長に聞いた。

（聞き手・佐藤　奇平）

神奈川大・兼子理事長インタビュー

人類の課題解決へ改革推進

兼子　良夫
神奈川大理事長

―理事長と学長を兼務することになった。

「少子化の時代にあって、大学は生き残りを懸けた大競争時代に入っている。世界標準の大学を目指すために、さまざまな改革を実現させなければならないが、教職員から選ばれた学長と、学校法人の経営者である理事長が一体となることで、『オール神大』としてスピーディーに改革を進めることができる」

―1928年に専門学校「横浜学院」として創立後、一貫して「教育は人を造るにあり」を理念に掲げてきた。今、どのような人材の育成を目指すのか。

「人類にとっての課題を解決できるグローバル人材を育成していく。欧米の価値観に基づいた今のグローバルスタンダードには、格差を広げたことなど反省すべき点はある。これに対し、神奈川大が目指すのは『寛容な心』『共生』といった日本が培ってきた価値観をしっかり理解した新たなグローバル人材。本年度に『国際日本学部』を開設したのも、そのためだ」

―来年4月、「みなとみらいキャンパス」がオープンする。

「周囲には国際的な企業が集い、世界とつながる国際港に臨む。さらに美術館やコンサートホールなど文化施設も多い。新たなキャンパスに通う5千人の学生にとってMM21地区全体が教育の場となり、相乗効果が生まれる。神奈川大の教育改革の象徴が、このキャンパスだ」

―新キャンパスに合わせ、学部再編を進めている。

「新キャンパスには国際日本学部のほか、『外国語学部』と経営学部を改編する『国際経営学部』が移転。いずれも国際的な人材を養成する。さらに、湘南ひらつかキャンパスにある理学部を横浜キャンパス（横浜市神奈川区）に移し、工学部から建築学部を独立させた上、文理融合の学部に再編していく」

―学部の集約に伴い、湘南ひらつかキャンパス（平塚市）の今後は。

「最先端の研究やグローバル人材の育成には、日常的に学部を超えた交流が欠かせない。横浜と平塚ではそうした交流ができなかった。平塚のキャンパスの活用方法は23年度までに決定したい」

―コロナ禍で、学生のキャンパス生活が大きく変わった。どのように対応しているか。

「学生の健康と安全を第一に考えたためとはいえ、苦しい状況を我慢してもらっている。希望する新入生向けに12月、キャンパスツアーを企画した。今後は対面とオンラインのハイブリッド授業を進めていく。コロナ禍で中止した卒業式と入学式は、ぜひやりたい」